

国際化と情報化の中の アイデンティティ

静岡大学教授
馬居政幸



一 感性の教育とは

本稿への執筆依頼書には、「感性を育てる教育」をテーマに、「国を愛し、平和を愛する心を育てる教育」を仮題にして、「郷土愛や国際親善など人や自然に対する感性を育てる教育についての意見を」とあった。しかし、編集部は意図を理解しつつも、私は表題を「国際

化と情報化の中のアイデンティティ」に改めざるをえなかった。何故か。

「国を愛する」「郷土を愛する」という言葉では、その意図する世界を現在の子どもたちの日常のリアリティ感覚（感性の世界）に結びつけて論じることが困難と判断したからである。もちろん、これらの言葉の意味を「教える」ことは可能である。より広くこの言葉で表現しようとする概念（コンセプト）を「理解させる」ことも困難ではない。オリンピックやワールドカップでの日本人の活躍を教材にした小学校六年の社会科授業、地域の高齢者や外国人を招待しての特別活動など、実践例は少なくない。だが、それで郷土や国を愛し、人や自然に対する「感性」や「心」を育てることになるのだろうか。

「感性（心）を育てる」という表現が意図するものは、教師（大人）が「用意した場」において、「教えられるもの（知識・技能・態度など）」を学習者（子ども）が「知ること」や「行うこと」にとどまるのではないはず。それは一人の自立した人間として「生きること（力）」と結びつくものでなければならぬはず。この点で、人が成長する過程で獲得した多様な知識や規範を、それを獲得した社会的

文脈から離れて、次々と生じる様々な場面（状況）に応じて取捨選択し、ひとまとまりの行動や感情として実践化するために必要な「自分らしさ」の形成、すなわちアイデンティティの形成と密接に結びついた表現と考える。その意味で、感性の教育は、子どもたちの日常生活経験と連動しなければ、その本来の目的を達成することはできない。

だが、現在の子どもたちは、普段の身近な日常生活の中で、国や郷土を愛するという感性を顕現させる場をほとんどもつことができないはず。それも、このような子どもたちの世界の変化は、学校教育の拡大とともに生じた現象と考える。いいかえれば、「感性」や「心」の教育という次元から学校教育のあり方を問題にするためには、それを必要とするようになった学校教育自体の特性を省みることから始めなければならない。その作業の糸口として、私の学校への視点の転換に気づかせてくれた一人のお母さんの言葉を紹介したい。

①「子どもの成績をほめてくれるのは親としてうれしいです。でも、この子は私の子どもではなくてなんですよね」

教えてくれるのでしょうか。私たちとても不安なんです」

①は、約十年前、伊豆の土肥町で出会ったお母さんの言葉。生涯学習計画策定のため、町の教育状況を調査する過程で小学校の校長先生から「この方のお子さんは学校で一番なんですよ」と誇らしく紹介されたあとの発言である。②は、本年三月、静岡市で出会ったお母さんの言葉。静岡市に住む男性と結婚したフィリピン人の女性で、私が専門委員をつとめる静岡市総合計画策定のための会議に市民代表として参加しての発言である。

二 学校が育む感性とは

学校で成績がよい子どもとは、大学進学を当然視される子。だが、土肥町は駿河湾に面した小さな町。都市部の有名進学校に通うのは困難である。早ければ中学から、遅くとも高校時代に家を出て下宿生活を始めなければならない。もし実力あって東京の大学に進学すれば土肥町の住民になる機会は限りなく縮小する。大卒を必要とする職場は土肥町には極めて少ないからである。読者の中にも、このお母さんの子どもと同様に、自分の生ま

れ育った世界、すなわち故郷を出（捨て）た方は少なくないはず。私もその一人である。

日本の現在の豊かさの基盤は、昭和三十年代から四十年代にかけての高度経済成長。その担い手は全国各地から都市に移動してきた若者であり、その手段として整備・拡充されたのが戦後の学校教育システムである。すなわち、義務教育修了者を故郷の農業ではなく都市の工場に就職させたのは誰か。成績のよい子どもに町を出て進学高校を受験することを勧めたのは誰か。銘柄大学に進学し、一部上場の企業や中央官庁に就職することを優れた人間の条件として語ったのは誰か。

学校と教師の果たした役割はこれだけではない。選抜の前提は全国共通の教育内容。それを教えることで、地域独自の世界（これが故郷）の価値を奪ってこなかったか。たとえば、方言にかわって標準語を重視したこと。通常、標準語の操作能力はテレビの普及とともに高まったと言われる。だが、標準語が方言の上位にあると教えたのは学校のはず。教科書に記述された言葉がすべて標準語だからである。言葉は単にコミュニケーションの手段ではなく、文化を伝える籠。地域独自の文化は方言に凝縮されている。学校は、その方

言と方言が伝える文化よりも標準語によって教える全国共通の内容を優先してきたはず。

さらに同様の傾向は知的な側面にとどまらない。昭和三十年代の半ばまで小学校には、農繁期休みがあった。それはそれぞれ地域社会の状況に応じて学校が運営されていたことを示す。だが、その後の学校において、子どもが生活する地域社会独自の文化や季節感がどれだけ配慮されてきたか。小学校はまだしも、中学校では教科内容を越えた生活様式までも統一してこなかったか。たとえば服装。日本列島の季節のズレを考慮しない衣替えの日に、学生服という名の制服に一斉に着替えることを強制してこなかったか。それは、歴史、自然、風土と結びついた地域社会の文化やそれを支える家庭の文化を無視もしくは低位におく「感性」を前提にしなければ成立しないはず。学校教育の課題として、知育偏重が指摘され、それにかわる感性や心の教育が強調される場合がある。しかし、感情のない人間や知識をもたない人間が存在しえないように、知の教育と感性（心）の教育はメダルの両面のようなもの。問題は知育偏重ではなく、いかなる知を重視する感性を学校は育ててきたかである。故郷を愛する心を育てる

教育を強調する前に、日本全国の子どもたちに対して、成長するにしたがって、生まれ育った地と自らを育んだ文化や自然から離れる（捨てる）ことをよいこととする「感性」が培われるようにしたのは誰かを省みてほしい。

同様のことは国という言葉で指し示す世界と子どもたちとの関係にも指摘できる。

学校が推進した教育システムを通じての若者の都市への移動は、水平的な地域間の移動のみでなく、垂直的な社会的上昇とセットである。すなわち、小・中・高・大という上位学校への進学は、東大を頂点とする銘柄大学への入学と、それとセットになった中央（国）官庁や日本（国）を代表する大企業への就職がゴールである。その点で、学校教育は、故郷とは逆に、国とのかかわりを自己の生き方に関係づける感性を育んできたといえよう。ただし、それは国家というレベルでのシステムを担う（優秀？な）人を、学校が用意する知識の記憶量と操作速度を競うことで獲得される順位（成績）を基準（業績主義）に選抜・配置するシステムとしてである。その結果、国家との距離は個々人の努力で獲得した成績（数値）の差に比例することになる。

そこで問われるのは国への愛ではなく個人

郷の文化は当然フィリピン文化である。いずれ帰国する子どもにとって問題はより深刻である。日本語による日本文化の教育は、日本の帰国子女問題が示唆するように、母国での生活に必ずしもプラスにならない場合がある。

そしてこれは外国からきた子どもたちだけの問題ではない。郷土愛、愛国心、ともに近代国家の成立とセットになった意識。生まれた地で生涯を過ごすことが当然であった村落社会（共同体）を出て、都市の住民に変化する過程、すなわち工業化の過程で生じた現象である。だが、情報化のグローバル化とワールドワイドな社会移動が日常化した世界で生まれ育つ現代の子どもたちにとっての故郷とは何か。たとえば、私の長男は埼玉の新興住宅地で生まれ、私の赴任とともに移り住んだ静岡市内の官舎で三歳から高校三年の夏までを過ごし、途中二度にわたり韓国での生活を経験し、僅か半年だけ市内の住宅街に設けた家で過ごした後、大学入学とともにつくば市に移った。多分、今後は静岡市で過ごした時間よりも日本以外の国で過ごす時間の方が長くなる確率が高い。長男にとって故郷は生を得た埼玉の郊外なのか。育った場の静岡の官舎なのか。ただし、このいずれにも

の成績。とすれば、成績のよい者にとって学校教育は国との関係を強める（アイデンティティの形成）ことに正の相関だが、逆に成績の悪い者には負の相関になる。その結果、学校によってマイナスの記号を付加された者が国と自分との関係を重視しなくなっても不思議ではない。さらに、選抜システムの最上位に国の世界があるということは、国の側に選ばれるのは少数者であるということ。多数派はアイデンティファイの対象から国という言葉で示す世界を除外せざるをえなくなる。

では選ばれた少数者には何を愛する感性が培われるか。これも疑問である。理由は選抜の基準が業績主義であること。業績主義は所属する集団自体ではなく、その集団の中のポジションに価値をおく。学校システムの勝者として国と直接かかわる集団（官庁、企業など）に所属できた者にとって、アイデンティファイの対象は所属する官庁や企業自体ではなく、その集団の中での自分の位置である。さらには、その位置を得る競争に勝つための業績づくり（仕事の遂行）自体にアイデンティティを見いだす者も少なくないはず。

したがって、学校で獲得した成績の高低と国家的な機関や企業への所属可能性の確率が

長男を知る人はいない。そして私が転勤すれば静岡に親類縁者はいなくなる。

長男は例外ではないはず。現代の子どもには、郷土という存在自体が不明瞭。だがそれを故郷喪失者といったマイナスイメージで語ることは避けたい。変幻自在な都市空間にアイデンティティを求めることも、デイスプレイの中のバーチャルなサイバー空間にアイデンティファイすることも可能だからである。さらに、それらがいかに生身の現実から離れた架空（幻想）の世界であったとしても、近代国家システムを構成する一民族、一言語、一文化という前提の幻想性が露になった今、単にアイデンティティを構成するリアリティの質が転換したにすぎないともいえる。

他方、郷土とは逆に国というフレイムのリアリティは、次の二つの契機の日常化により増加しつつある。その一つが先に紹介したフィリピン生まれのお母さんに代表される身近な世界を共有する異文化の人たちの存在。もう一つはパスポート。自国（文化）の認識は他国（文化）との対比で明確になり、国を出るための証明が自己の所属する世界を明示するからである。その意味で、国の境を越えて急激に進行するヒト、モノ、カネの移動、す

正比例することを正しく考える限り、選ばれなかった者のみでなく、選ばれた者に対しても、学校教育が国への愛を優先する感性や心を育むこと、すなわち国という世界のあり方をアイデンティティの中に取り込むことは困難といわざるをえない。ただし、以上のことはあくまで約十年前のお母さんの言葉をもとにした考察。もう一人のお母さんの言葉から、今と未来の課題を問いなおしたい。

三 国際化と情報化が進行する中で

かつて、静岡県では工業都市の浜松市を中心に、外国から働きにきた人たちの子どもが教育の問題になった。日本の学校の授業は日本語を話すことが前提、たった一人の外国の子どもが参加しただけで成立しえなくなる。先生方は悩み、様々な工夫と努力を重ね、現在では異なる文化で育つ子どもがいる授業が自然な風景になりつつある。だが、問題はここから始まる。日本の子どもに国を愛し、郷土を愛する心の育成が求められるなら、外国からきた子どもにも同様の課題が提起されて当然であろう。まして、フィリピンから嫁いできたお母さんにとって、国籍は日本でも故

なわち経済のボーダーレス化と情報のグローバル化が、自己の所属する国という集団の存在を際立たせる。それは自己のアイデンティティの形成過程に、自ずと自国と他国とのフレキシブルな関係が組み込まれる可能性を示唆している。異文化理解から多文化共生へと変化するワールドワイドなニーズに積極的に応じる基盤が子どもたちの間に育まれていることは間違いないと考える。問題は子どもではなく教える側にある。

かつて近代国家の成立過程では、生まれ育った世界（故郷）と新たな国家との関係が問題であり、その間をつなぐシステムとして制度化されたのが学校である。この関係を今と未来に当てはめれば、今後必要なのは日本という国と他の国々との間をつなぐシステム。その具体像は未だ明らかではない。だが、学校教育が再びその力を発揮できるかどうかの鍵は、子どもたちの教育のあり方の前に、教師とりわけ管理の任に当たる教師が上述した変化にどれだけ柔軟に対応できるかであること

を強調しておきたい。

（このような観点からの日本の学校教育の改革の方向については、『現代教育科』（明治図書）に連載中の拙稿「アジアをどう教えるか」を参照いただきたい）

【特集】

感性を育てる教育

共感や生命の尊重を育てる教育……………7	共感に根ざしたボランティアの文化を創生するには 立木 茂雄
感性を大切に育てる教育……………12	大島 清
自然に感動する心を育てる教育……………16	徳武 靖
国際化と情報化の中のアイデンティティ……………20	馬居 政幸

巻頭インタビュー・教育改革の行方① 「生きる力」と「ゆとり」……………4	河野 重男
---	-------

連載 ③③ 世界から見た風景……………	
中国の「壁」は生き残れるか……………24	小関 哲哉

◆数字でみる青少年◆……………31	
青少年の問題意……………	角田 リサ

教育の話題……………	
イルカのひとりごと……………26	鳥羽山照夫

教室に吹く風……………26	松本 陽一
---------------	-------

上海の日本事情……………26	余語 暁子
----------------	-------

本部より……………	
評議員会 総会・研究協議会……………28	
教育職員の資質向上検討委員会の新設……………29	

支部より・鹿児島県……………	
中学生の国内交流教育……………30	吉元 文治

我が校の宝……………32	
山形市立第一小学校・宮崎県立高鍋農業高等学校・ 東京都中央区立月島幼稚園・和歌山県立桐蔭高等学 校・新潟県新潟市立新津第一小学校	

教育の玉手箱……………10・29	
------------------	--

次号予告・編集後記……………34	
------------------	--



社団法人日本教育会のシンボルマーク

本会の設立20周年を記念して、シンボルマークを作成しました。
桜の花弁をモチーフとして、円形のデザインとしました。円は円満、協調を現し、本会の組織と協力関係をイメージするものです。マーク中央の文字が遠くからも判読しやすいように明快な書体としました。
旗では、花弁に銀を、これに連結する扇形部分を黄金色としました。黄金色は高雅とエネルギーをイメージし、生命の色で伸びゆく子どもを象徴する黄金にも通じる色です。銀も金に次ぐ色とのイメージで花弁に用い、それに最も対比する色として、文字に青を用いました。青は知性と厳格さを示すイメージがあり、教育の理想に通じるものがあります。

社団法人日本教育会 平成9年度行事予定

◆第23回 社団法人日本教育会 評議員会 総会・研究協議会

<評議員会>

日 時 平成9年6月26日（木）14：30～16：30
会 場 メルパルクHIROSHIMA（広島郵便貯金会館）

<総会・研究協議会>

日 時 平成9年6月27日（金）10：00～12：50
会 場 メルパルクHIROSHIMA（広島郵便貯金会館）

◆第14回「秘境の里研修」

日 時 平成9年8月6日（水）～10日（日）4泊5日
会 場 秋芳ロイヤルホテル（山口県美祿郡秋芳町秋吉台）
参加費 40,000円
募集人員150名

◆平成9年度 第22回全国教育大会大阪大会

日 時 平成9年11月21日（金）9：00～16：30
会 場 大阪府立青少年会館
主 題 日本人としての生き方を探究する教育の創造
副 題 心の豊かさを育む教育

★第1回支部長会	平成9年5月15日（木）東京
★第1回理事会	5月16日（金）東京
★評議員会	6月26日（木）広島
★総会・研究協議会	6月27日（金）広島
★第2回理事会	7月11日（金）東京
★第14回「秘境の里研修」	8月6日（水）～10日（日）山口・秋吉台
★常任理事会	9月5日（金）東京
★第2回支部長会・第3回理事会（合同会議）	10月24日（金）福岡
★第22回全国教育大会大阪大会	11月21日（金）大阪
★全国校種別代表者会議	12月5日（金）東京
★第4回理事会	平成10年1月23日（金）東京

平成9年4月1日発行（毎月1回1日発行）／第246号
昭和50年12月27日第三種郵便物認可

教育界のオピニオン誌

日本教育

No.246

平成9年

4・5月合併号

〔特集〕

感性を育てる教育

日本教育 4・5月合併号

昭和50年12月27日第三種郵便物認可
平成9年4月1日発行

通刊246号

発行所

社団法人 日本教育会

〒100東京都千代田区千代田3-1-3 国立教育会館内
TEL 03(3558)1225 FAX 03(3558)6697

定価200円

〔本体191円〕

社団法人 日本教育会

